

# 基調提起

## 拡大マップ共闘 春期合宿に向けて

|                    |   |
|--------------------|---|
| 1. はじめに            | 1 |
| 2. 1.12問題・総括       | 2 |
| 3. 拡大マップ共闘総括       | 5 |
| 4. 管内管理・支配体制解体の課題  | 7 |
| ・ 神田地区治安体制解体の当面の課題 | 8 |
| ・ 蛇の足              | 9 |

文責 Y・M  
編集 拡大マップ共闘春期合宿  
実行委員会 出版部

## はじめに

〈書き手〉〈読み手〉の解体・変革を保障する運動体として拡大マツる共斗を位置づけて半年を経過しようとしている。この間、マツる共斗及び拡大マツる共斗に結集する諸戦線・諸サークル・諸個人は、学館実力解放斗争、教職斗争、学費斗争等を主体的に担ってきた。しかし、われわれの運動の不充分性は、あの生協問題をめぐる情況派・生協労組と戦旗派のゲバルトに端的に表わされただろうと考える。と同時に、生協問題に積極的に介入したわれわれの運動は、その不充分性を止揚する決定的な要因であっただろう。現在、われわれは明確に1・12問題を総括する中なる、ノンヒラト運動の閉鎖的傾向と訣別し、全体性を獲得しなければならぬ。戦旗派・情況派・生協労組に対する自己批判要求は、まさにそうしたわれわれへの訣別要求であり、自立宣言であった。



何を以て革命・反革命を決定するのだ。

生協同塾をめぐるⅠ・Ⅱ 武蔵衛塾が明らか

痛く自己批判的に総括されなければならない。

そのような批判が、自らの力量によって

天下新醫學を闘ひ抜き、その伯別改

の歴史的な解体、変革といふことは、単

$\vee \wedge$   
 $\vee$  の関係性の解体なのである。こう

みならず、われわれ内部のね刀をも解体する

易に語られてはならず、そのまづな関係にある

ばならない。

さひう、その諸成員、諸カークル、諸個人の内実そのものが問われるのである。そして、こうした結合関係そのものの組織の活性化をもたらし、諸個人の自立性が尊厳されるのである。われわれが「コンセプト」として存在する最もここにあるのではない。まさに自立の同歩は組織の自立が先行するのではなく、諸個人の自立なのである。そしてその自立の内実は思想的自立であり、バルト的自立である。その両面性こそが全体性であり、自立の必要条件である。まさに意識性はバルトとの結合をもつてしか自立しえないことは、1・12両面が明証に示していたであろう。根力の存在は、意識の搾取だけではなく、根源的な暴力の搾取にもあることは、この同歩の全長と運動の過程でちとられてきた情ではなかったのか。大新斗争の過程で意識・存在・関係性の解体と、われわれがわざわざ表現したことが、それを内在的に示していたであろう。存在の解体は替わったものの復讐でもあるのだ。

意識変革を保障し、物質化する内実は運動実践であるが、その運動実践は暴力性をも内在させているものである。運動そのものが表現であり、その表現はあらゆる表現型をもたね

ばならない。

われわれの語る主体変革、自己変革は単に意識性の面影のみではあり得ず、その意識性を物質化しなすとするならば、必ずしも暴力を媒介しなければならぬであろう。このことは、暴力を絶対化するものではなく、われわれの欠陥を覆蓋するこの状態にすぎない。意識性における緊張を創出する同時に、存在性における緊張、その緩和としての関係性の緊張の全体性においてわれわれのトータルな主体変革はじめて獲得されるであろう。

現在、このことを総括することは、バルトの脆弱性をその超える一歩であり、自らを自立した大衆として位置づける必要があるのである。



表現主体（言語表現主体）として登場する一  
とのみでは決定的に不十分である。たゞに  
主体的に結果に關するものは必要ではある。  
そしてそれは、依體構造としての關わり方  
は如何にしてなされるのである。關係性の問  
題は八端の手の依體主体としての登場以上  
に、立動の全体性として、言語表現立動、學  
新立動を止揚したマツル山等（マツル山）  
と共同性を獲得する過程にあるのだ。マツル  
山等へマツル山と云うことになった場合、單  
にマツル山の側なる表現した時であつて、  
果してマツル山を總括化したところからの  
表現ではない。

立動の全体性といった時、それは、主体変  
革を目的意識的に追求する意識的立動であ  
り、超絶立動・文化思想立動・革命のメテオ  
創造としての言語表現立動・トータルな表現  
立動の全体性を獲得する過程、共同の結合の  
關係を保障する方向性を保証する非公認的  
共同組織であるわけである。

拡大マツル山の立動、總括と一應程度の  
線括の中から組織的イメージとしてきた。二  
れを具體的に方針化し、方針化はなるまい。  
マツル山の集約的表現は、八端の手へ  
書き手への關係性の解体、変革であつたこと  
は再三記して来た。そして、拡大マツル山と

つてあつた。そして、われわれの政治的意  
として、新聞学会の止揚と表現活動として  
、学内管理支配体制の集約的スローカン  
としてきたのである。現在、マツル山  
は、管理支配体制の解体に表現される政治的意  
を意識的課題として位置づけるし、拡大マツ  
ル山においては同様に位置づける。その具體的、和  
別的課題としてこの間われわれは、學内管理  
立動、一部政策阻止、政策阻止の山に  
を展開して来た。マツル山に教職員等は目的  
根底的な授業・教養などの山に展開して  
きた。当然それは、自らの生きかゝる主体変革  
を問う山にある。

大学内管理支配体制の解体は、単に学生を管  
理されざるに止まるという被管理的立場な  
るの告発的な内面性のみではない。大学その  
もの、現代の国家のその高層は管理社会化  
（国家統治の側面）の象徴的存在として  
ある。この山にこそ、管理支配体制の根本  
を問うて存在している。多岐性制をま  
るスローカンには、その再生、努力力  
の再生を要求する大学の社会的存在の  
意味はきわめて大きい。教育秩序の崩壊  
あるとある大学のその存在の重要さは、政治  
的立場から見て確定できるものではあ  
ない。（二つ）この大学の社会的存在は、68・

約半の学園山等の過程で、大学の自由、学園  
の自由などの如きは、内外に管理支配としてき  
たことを暴露される、その暴力性をむきだ  
した。教職員等、ロツクアウトといった  
形で、管理支配体制を完全に暴露したのであ  
る。）

二つ）この大学の存在は、大学内部における  
管理支配体制を統一被支配の利益を生み出  
すだけではなく、大学の社会的存在としての  
、目的を定める重要な環であり、人民の口  
しりやうとを差別し、抑圧する存在であり  
、分断支配・管理支配の相違を形成している  
存在であることが確認される。そしてこの二  
つは、われわれ学生の存在性そのもの、大  
学の社会的存在と一体となつて存在するので  
ある。二つ）この山にこそ、管理支配体制の根本  
を問うて存在している。この山にこそ、われ  
われ学生の存在は、主体変革・自己変革と  
して表現される如く、極めて意識的、思  
想的変革を要求する。その際、入園山の機  
する下層のロツクアウト・被差別部族・  
在日朝鮮人の存在と、自らの思想的拠点と  
する方向性は正しく根拠がある。二つ）  
二つ）にわれわれの意識変革は、学内管理  
支配体制の解体にこそ目的がある。二つ）

# 学内管理支配体制

## 解体の課題

学内管理支配体制は、大学校力の集中的攻撃、すなわち、学内の夜間ロッカウト・ロッカウト体制、学内の完全ロッカウト、寮・学館に対する攻撃として、その本質を露呈した。

学館ロッカウトは、数度行われた暴力解放斗争によって解放されたが、自主管理の現代的な不充特性をばきりと認識せざるを得ないだろうし、そうであるが故に、ますます自主管理を断ち切る中身、真の解放空間の創出を待ちどわしている。そして、解放空間をさらに拡大する方向性を提示しなければならぬ。

ロッカウトは何を意味しているのだろうか。学内管理支配体制の根幹的、日常的な環境、授業―教室の中にあることを意味するならば、解放空間の拡大は、基本的には授業―教室解放と解放空間の創出の方向性を示さなければならぬ。教職員等をみると、そのような態度を内面化させていることは明らかであつて、又、具体的運動の過程は、その問題を普遍的に提起して来たであつて、そ

のことは、オニ、オニの教職員等が、大学校力との緊張関係の新たな創出として、授業―教室解放として、拡大していく方向性を提議して来なければならないことを意味しているであつて。

管理支配体制のこうした日常性場面からの叛乱は、諸個人の目的意識的な主体性重の追求の中で、おそろくは今後予定されるであろう学費値上げや、大学廃止の具体的手段の重要地位を占めていく二部改廃問題等を軸に、一層強化していくであろう大学校力の攻撃を回避しつつ、学内管理支配体制―大学解体の内部を象化する叫びとしていかなければならぬ。

こうした学内管理・支配体制解体の叫び、運動は、一・二回、拡大マップの発出を踏まえるならば、学内運動―明大斗争を全面的に担う全体的な大衆運動を担わなければならない。自治会運動、生協運動といった学内全体状況は、いわば、党家に任せておけばよいといった理想を脱し、かつ、党派政治を否定するならば、自らの批判等を矛と同時、それと、学内全体状況―大衆運動との関係を強調し、諸リール、諸個人が自覚える必要がある。

自己批判要求「運動」において、戦術派と

の共鳴が濃縮した現在、緊張状態は一切解決してはいないし、われわれの自己批判要求の内実は現実の運動展開によってなされるべきであらう。





# 『蛇の足……』

以下述べてきたように、この二つの管内組織

支配体制解体、神田地区自治体制解体を主要

な目標を掲げ、その第一は、組織的・政策的

的進歩と同時に、権威主義を批判的、思想的

に相対する。自共共立の線に沿って、自主的

な組織解散の面で行って行くべき

であろう。(現在組織解散の面では、武

道地区は行われている。この武道地区は、

武道を人々の武勇とする思想から、何々の思

想を内包したところにある。それは、手

、あるゆる戦線、あるゆるワール、人々が

主体的に自らの解放を規定して、自らの自

別の立場を提起する中から普遍性を獲得して

いくことになるであろう。それを媒介に

する中からの異なる個々の運動との共有関係

を追求していくことが有効であるであらう

と考える。

## □管理支配体制解体の？

・組織解散・自主意識の育成

・ロウマワト体制解体

・対策本部・改革部解体

・二部政廃止

・教職員の勝利、や二部の教職員の多

・学費値上げ阻止

## □神田地区自治体制

### 行政体制解体の？

・大学関係

・出版部組・生活部組との連帯

○○○

(F6からのつぎ)

表現されるわけだが、それは、自らの学生と

しての存在性を解体するものとして置かれる

。このように、大学の社会的価値と、自らの

存在性を対立化するならば、管内組織を解体

制解体・大学解体の山として断頭せしめ

なければならぬ。このように、何れも一

社公衆の山坂に、政治過程を断頭とする

ならば、自らの生産性はありえないであろう

。自らの存在領域、存在性を規定するには、われ

われの山は高い。社会制度の批判、山をの

越えなければ、自らの存在性を規定できない

であろう。そして、その社会制度における振

乱、山は、横の結合を相互に同時的にな

らざる中から、革命の内面としての価値をな

きみえてくるであろう。

さらに、自らの存在領域の解体は、自らの

存在性。と同時に、自らの、被差別部族の

民、在日韓中人民のこの連帯を維持する

のである。

不承不承な以上の連帯を維持する中から

、われわれの連帯的存在性、学生存在として

の自己の存在性、大衆的存在性、被差別部

族の存在性、被差別部族(韓中、大衆等)

における存在性を創出し、山を断頭し、われ

われわれは、自らの存在性を規定する

現在神田地区自治体制と連帯を断頭し、い

ることを、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

と断頭し、自らの存在性を規定する中から

、われわれは、自らの存在性を規定する

# 管理支配体制解体？

党體解放・自主管理貫徹！

ロツワアウト体制解体！

対策本部・改革委解体！

二部改廃阻止！

教職斗争勝利・カニ、カ三の教職斗争を！

學費値上げ阻止！

## 神田地区治安体制解体？

大学間共闘を！

出版労組・生協労組との連帯を！